

<報告 1>

今回、東京外国語大学で行われたワークショップ「紛争下／紛争後の中東地域を研究する」に参加する貴重な機会をいただいた。本ワークショップでは、中東政治運動を専門とするライラ・サーレフ氏を招き、中東研究における方法論について講義を受けた後、参加者を交えた意見交換を行った。

サーレフ氏は「下からの政治」に着目するアラブ政治や国際関係を研究する政治学者である。そのような専門家を交えた本ワークショップでは、紛争下または紛争後を研究対象とする上での方法や対象、視点について話を聞くことができた。私自身の研究テーマも内戦であり、対象を含めた周辺地域も不安定な状態にあるため、現地に赴くという方法をとることができない。また、ある事象の変遷について書く際、自身の記述で対象を齟齬なく描写できているのかといった悩みがどうしてもぬぐえなかった。しかし今回、その事象について歴史書を何冊も重ねて確認することや、本に記載されず、認識からこぼれてしまうような情報をインタビューで拾い上げることが必要であるという話を聞き、今後の研究でも生かしていきたいと思った。

また、今回のワークショップを通して、ある疑問がさらに大きくなった。それは、「中東から見た国際関係論」と呼びうるものがあるのではないか、ということである。現在の研究では、欧米型の国際関係論の理論を用いることがほとんどである。しかし、トルコの外相ダウトオールは国際関係論の研究者であり、彼の認識から外交方針が打ち立てられたように、中東には中東ならではの国際関係観があるのではないかと考えるようになった。この疑問については、今後の自身の研究でさらに深めていきたい。

本ワークショップに参加させていただけたことで、自身の研究の方法論についての悩みのいくつかを解消し、今後の研究に繋がるリサーチクエストを得ることができた。今回の経験を活かし、研究を深めていきたいと思う。

(大橋悠佳 創価大学文系大学院 博士前期課程)

<報告 2>

今回のワークショップでは、最前線で活躍されているライラ・サーレフ先生から、フィールドワークの方法や心構えといった基本的なこと、紛争下あるいは紛争後の社会を研究するのに必要なこと、そして一般的にオリエンタリズム的な見方をされがちな中東地域をどのように研究するのかについて、様々な知見を得ることができた。

紛争中や紛争後の国家では、中央政府、反体制派、非国家アクター、武装勢力、市民など、それぞれ主体の思惑が交差し、対立し合うなど極めて複雑な構図が存在する。そうした複雑な内戦やその社会を理解する、あるいは研究する際、単純化しすぎたり、一方の主体の見方のみに固執してしまうと、その国家や社会の構造が可視化されず、その国を理解したとはいえなくなってしまう。加えて、中東地域には一般的に、「宗教対立」や「民族対立」が蔓延

っている、「好戦的な人々」といったオリエンタリズム的なまなざしが注がれがちである。そうした見方によって、中東地域での現象が歪曲化されてしまい、新たな火種が生じる危険性もある。近年のイスラエルによるガザ紛争やシリア内戦、イエメン内戦を含め、中東地域では様々な紛争が発生してきたが、それらは「宗教対立」や「民族対立」であるというよりも、他の地域で見られるような紛争形態をもっていたり、様々なアクターが政治的に関与し対立し合った結果であったりする。中東地域に関する的確な知識の上に、検証し、分析することなど、研究方法について再度問い直すことができた。

また文献調査だけでは、その国の内実、現実を深く理解するには限界がある。ライラ・サーレフ先生が言うように、幅広い人々から生の声を聞き、現地でどのようなことが実際に起きているのかを知るためには、フィールドワークが極めて重要であることを痛感しました。シリアに関する私の研究は、どちらかというところ、新政権の取り組みのみに焦点を当てていて、国民や市民社会からの目線が欠けているといえる。ポスト紛争期に移行しつつあるとはいえ、未だ中央政府がシリア全土を掌握できておらず、特に沿岸部や南部では武力衝突が頻発していること、治安や社会情勢が不安定であることなどから、研究者として渡航することは難しい現実がある。しかしながら、内戦後、新政府がどのように政策や国家運営、再建を進めていこうとしているのかに加えて、そうした政府の取り組みに対して、国民や市民社会はどのようにリアクションしているのか、またそれにはどれくらい影響力があるのかなど、国民国家の重要な要素である国民の存在を意識することで、その国・社会のことを深く理解することができる。現地でのフィールドワークが簡単にできない状況にあっても、インターネットなど様々なオンラインツールが存在する今、市民側の声を「聞く」ことはできるため、世論調査やオンラインインタビューなどを通じて、できる限り市民の声をくみ取っていきたいと、講義を聞いて考えた。

また、フィールドワーク調査にて、特に紛争を経験した人々から話を聞く場合、どのようなことを心がけて調査を行うべきかなど、紛争後の社会におけるフィールドワークの心得を学ぶことができた。以前、イスタンブールでシリア難民の方と話をすることがあり、シリア内戦中の経験談などについて聞こうと試みたことがあった。しかし、初対面であり、かつ内戦というトラウマを抱えている方に、気安く戦争のことを聞いたりしてよいものかと悩んだ末、結局聞きたいことを聞けずに終わってしまった。フィールドワークから帰ってきた後も、この出来事について、どうするのが最善だったのだろうか悩んでいたが、今回この講義を通じて、内戦後の社会でフィールドワークやインタビュー調査を行う際、何を考慮する必要があるのか、どのような事前準備をするべきかなどの知見を得られたため、その学んだことを今後の調査に活かしていきたい。

本ワークショップで学んだことや講義内容は、私自身の今後の研究に大いに役立つものであったので、ここでの学びや知見を参考にしながら、研究を進めていきたいと考えています。

(藤永 凜 立命館大学大学院国際関係研究科 博士課程前期課程)

<報告3>

本ワークショップでは、紛争下および紛争後の地域を研究する場合の方法論とその実践について、ライラ・サーレフ氏によるレクチャー、および参加者を交えたディスカッションを通じて再考した。参加者は中東地域研究に携わる研究者や大学院生が中心で、資料へのアクセス、フィールドワークやインタビュー調査などをするに際してそれぞれが抱えている課題を共有し、議論を行った。それらに対するサーレフ氏との双方向的なやりとりを通じて、方法論やデータの扱い、さらには、研究上の倫理やポジショナリティなど多様な話題について新たな視点が得られた。ディスカッションでは、それぞれの調査経験に基づく実践的な意見が交わされた。たとえば、インタビューでは、組織上位層の者よりもその周辺にいる人びとからの聞き取りの方が、活動実態がより明確になる点などが指摘された。こうした議論は、これから現地調査に取り組む大学院生にとって有益であった。以下では、本ワークショップへの参加を通じて考えた点を述べる。

紛争を抱える／抱えていた国および地域について研究する場合、研究者はフィールドワークを通じて、社会の急激な変動により日常生活を奪われた人びとと直に対峙することになる。たとえば、調査対象者から研究者に対して突きつけられる——サーレフ氏によるとアラブ世界において頻繁に尋ねられるという——「Who sent you?」という問いは、そうした不安定な状況を如実に表すものであろう。

紛争のみならず革命や政治変動が頻発する中東地域において、変化の始まりと終わりを定めること自体が困難である。そうした状況では、研究者が事前に持つ知識や先入観、そして「insider／outsider」としての立場が鋭く問われる。調査対象者に調査の目的などについて説明し、事前了解をとることが大前提ではあるが、それだけで充分なのか。研究者は、単に自らのポジショナリティを明かせばよいのだろうか。

この問いを考える上で、サーレフ氏が示した以下の指摘は示唆的であった。「私たちは自分のポジショナリティの要素を消すことはできないが、それらを省察し倫理的に振る舞おうと努めることで、①互いの関わりを最大限に活かすことができる、②フィールドワーク（「データ」）に対する自身の解釈を豊かにできる、③得られた経験や思考の変化を知の体系に対して透明性をもって共有できる」。

ポジショナリティは個人が選べない位置づけである。だが、フィールドで出会った人びとの語りを「生きた経験」として捉えることで、研究で扱った事象を単なる「研究の事例」と固定せず、研究者と調査対象の「内／外」の境界を流動的に理解することが可能になる。これは、相手との信頼関係を築くことにもつながる。

研究者は特殊な存在であり、対象について知ろうとすること自体が一定の暴力性を帯びる。しかし一方で、地域研究は他地域との比較を通じて自分の社会を再考する営みでもある。本ワークショップへの参加を通じて、フィールドやデータとの向き合い方のみならず、ポジショナリティを新たな社会的関係性を生み出す概念として捉える視点を得た。この視点を、今後のフィールドワークでも活かしていきたい。

（濱中麻梨菜 東京大学大学院総合文化研究科 博士課程）